

アルプスのきょうだい



アルプスのきょうだい

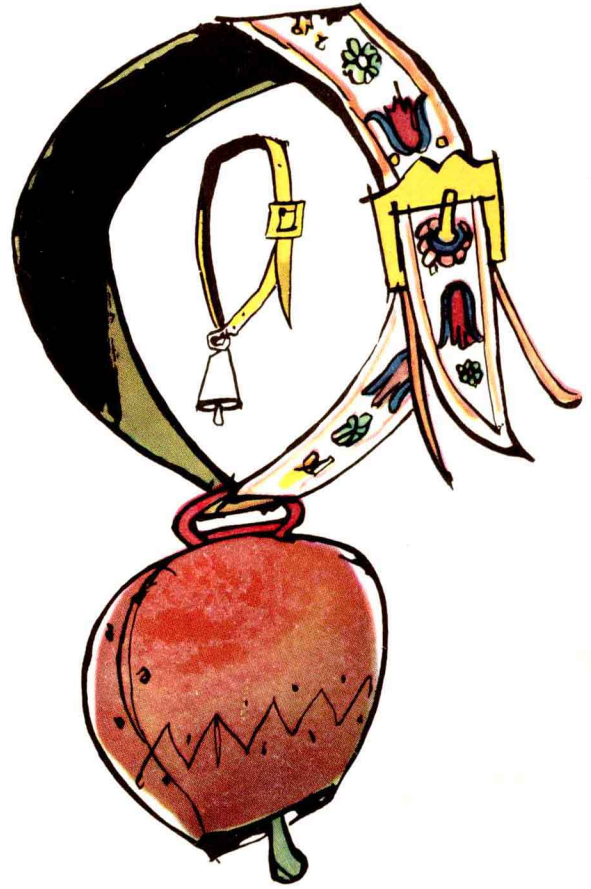
文 ゼリーナ・ヘンツ

え アロワ・カリジェ

やく ^{みつ}光 ^{よし}吉 ^{なつ}夏 ^や弥



岩 波 書 店



スイスの山々では、夏のあいだ、まきばで、牛たちに、
草をたべさせます。牛たちは、くびに、すずをさげていま
す。小さい牛は、小さいすずを、大きい牛は、大きいすず
を――

冬になって、牛たちを、小屋に入れるときには、すずを

ウルスリのすず

はずします。

冬がすぎて、三月になると、春まつりがやってきます。

村では、かねをならして、寒い、くらい、冬の日が、おわったのを、おいわいします。

男の子は、めいめいに、できるだけ大きなすずをもって、村じゅうをねりあるきます。ジャラン、ジャラン、すずをならして、冬をおいはらい、日のかがやく春をむかえます。村じゅうの人たちは、にこにこわらって、そのすずに、おかしや、木の実や、リンゴなどをいれてくれます。

ところが、大きいすずは、大きい子どもしかもてません。小さい子どもは、小さいすずをもって、行列のいちばんびりに、ついていきます。

この本は、春まつりが、また、めぐってきたとき、小さい男の子のウルスリが、大ぼうけんをして、ぼくは、もう、ちびじゃないんだと思った、おはなしです。



とおい山のふとこ
ろに、ちょうどあ
なたくらいの、男おとこの
子が、すんでいます。
ちっぽけだけれど
も、こぎれいな、こ
の村むらを、ごらんなさ
い。
いちばんてまえに
見えるのが、その子
の家いえです。

家は、古くて、こじんまりしていて、かべには、絵がかいてあります。

もっとよく、ごらんなさい。赤と青のきものをきた人がふたり、おもてにたっています。

それが、おとうさんと、おかあさんです。

小さい子のウルスリは、——いま、かけてきますす！



これが、山の子のウルスリです。

とんがりぼうしをかぶって、おとなにそっくりのかっこうをしています。

(山も、そんなかたちをしています)

ぼうしは、いま、ウルスリの家いえの、うまやにねている、ヒツジの毛けで、こしらえたものです。

ウルスリのおかあさんは、織おったり、ぬったり、あんだりして、ウルスリのシャツや、ぼうしや、半ズボンはんを、つくってくれます。

おとうさんは、ウルスリのために、長ながぐつをつくったり、いろいろのことをしてくれます。



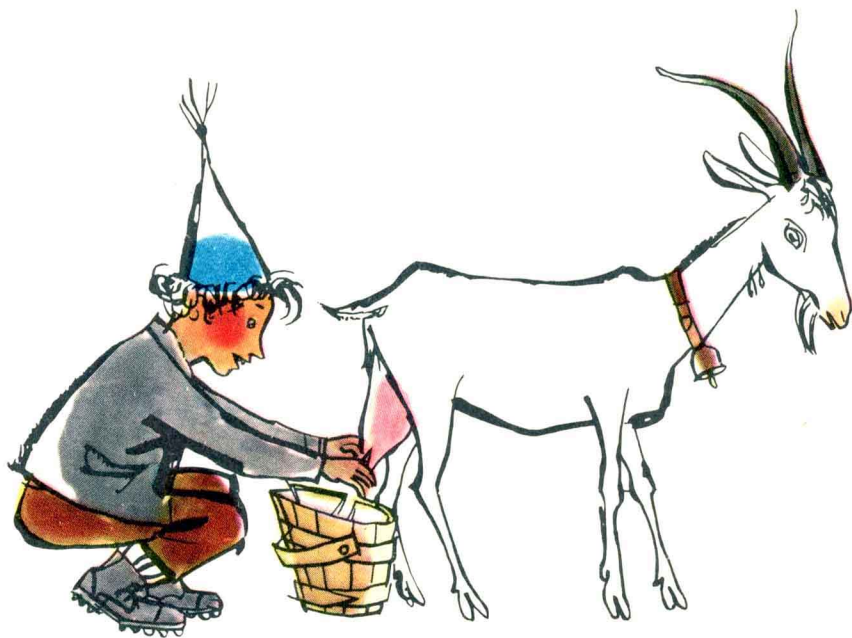


ウルスリだって、おと
うさんのてつだいをしま
す。

おとなにまけないくら
い、よくてつだいます。

牛^{うし}に水^{みず}をやったり、ほ
し草^{くさ}をはこんだり、夜^よが
あけるまえに、牛小屋^{ごや}の
そうじをしたり――

おかあさんに、よばれ
たときは、ハツカネズミ
のように、チヨコチヨコ
やってきて、水^{みず}をはこん
だり、ごはんのしたくを
てつだったりします。
なかよしのヤギの、ち
ちをしぼるのも、わすれ
たことはありません。







うちのなかのおてつだいも、そのお
てつだいも、みんな、すむと、ウルスリ
は、村むらの子どもたちとあそびに、わあっ
と、とびだしていきます。

これから、あしたの行列ぎょうれつでならす、す
ずを、かりにいかなくちやと、ウルスリ
は、みんなに、はなします。

どうです、ウルスリの、このとくいそ
うなようすは！

音おとの大きな、でっかいすずをかりて、
大きい子どもたちと、せんとうにたって
ねりあるく、つもりなのです。

子どもたちは、すずをかりに、みんなして、ギアンおじさんの家^{いえ}に、
やってきました。

おじさんは、すぐに、すずを、もってきました。

みんなは、いっせいに、さけびました。

「その、でっかいのを！」「でっかいのを！」

ウルスリは、うしろへ、おしやられてしまいました。

やっと、まえになったときには、いちばん小さなすずしか、のこって
いませんでした。



ウルスリは、
かなしくなって、
なみだを、ぽろ
ぽろ、こぼしま
した。



「これじゃ、みんなに、わらわれやしないかしら？」

子どもたちは、もう、「あは、あは」やっています。

「やあい、ちっちゃなすずの、ウルスリ！ あしたは、おまえがぶりっこだ！」

子どもたちは、いってしまいました。みんな、ウルスをばかにして。小さなすずしか、かりられないで、ウルスは、すっかり、しょげてしまいました。ことしこそ、びりなんかにならないで、せんとくにたつつもりだったのに。

せんとくには、いつも、大きい子が、大きいすずをふり、大きな声でうたいながら、とくいになって、すすむのです。

カラン、カラン、わい、わい、行列をひきつれて、村じゅうのうまや、井戸をまわります。そして、どこの家へでもはいつていつて、すずをならして、冬をおいはらいます。それから、ありったけの声で、うたつて、たのしい春をよぶのです。

すると、村じゅうの人が、うきうきして、木の実や、おかしを、すずにいっぱい、いれてくれます。

けれども、小さな子どもたちは、寒い家のそとで、まっていなければ

なりません。そして、なんにももらえずに、子牛こうしの小さなすずを、もつてかえます。ウルスリは、子牛にはなりたくありません。

ちっちゃなすずのウルスリなんて、

ぜったいに、いやです！

ウルスリは、なんでもするかくごです。けれども、いいかんがえは、なかなか、うかびません。あれや、これやと、かんがえました。

それから、はっと、とひあがりました。

山のとっぺんの夏小屋なつぐやに——あそこのかべのくぎに、大きな、とても大きなすずが、かかっていたっけ！

